

「英語教育」という幻想

阿部公彦

1 英語に熱くなりた

今、英語教育が熱い。といっても「よし、英語を勉強しよう」と盛り上がりつつあるのではない。熱いのは「英語教育」をめぐる議論の方である。二存じのように、明治以来、この「英語教育が熱い現象」は繰り返して発生してきた。しかも議論はたいして同じようなところを堂々巡りする。多くの人は思うだろう。これだけ英語教育をめぐって私たちは熱くなってきたのに、なぜ英語そのものについてはなかなか熱くなれないのか、と。

まったく同感だ。つべこべ言う前に、まずやろうよ！と言いたくなる。ただ、実は「つべこべ言う前に、まずやろうよ！」という態度そのものが、この熱い論争の一翼を担ってきたのだからややこしい。「英語は英語でやろう。理屈抜きにとりあえず英語の中に放り込め！」と主張する人が常にいる。

はないか。そうなると、形を整えただけの儀式的な英語、ついに終わるのではないか。また「オウム返し」というやり方には心理的な抵抗があるだろう。むしろそういう人が多数派ではないだろうか。幼児期にはこうしたやり方は有効だが、自意識たつぶりの思春期の青少年や、ましてや大人にそう簡単に強制できる方法ではない。そしてより根本的には、これで「知的な英語」やいわゆる「仕事で使える英語」が身につくのかという疑念がある。言葉の知的側面を無視して道具、実用、スキルと連呼する人は、大事なことを見逃している。あとでも詳しく述べるが、こと言葉の学習に関しては「注意」「興味」「意味」という要素がきわめて重要なのである。

にもかかわらず、この二〇一三〇年の中等教育は明らかに「オウム返し型」に舵を切ろうとしてきた。その一方、英語は相変わらず熱くない。産業界は「これでは困る」と大きな声をあげているらしいが、そんな中で、依然として「文法重視や訳読主義のせいで日本人は英語が使えない」との旧来の批判が繰り返されるのは、いささか奇妙なことではないだろうか。

2 英会話の起源

このあたりの事情について更に考えるため、最近東京大学出版会から上梓した『善意と悪意の英文学史』の内容の一部を紹介したい。タイトルからはあまり想像できないかもしれないが、この本は英語教育にかかわる問題も扱っている。第一章の

「文法なんか忘れてしまえ」「英文和訳なんかしてる暇はない」と言う。

仮にこうした英語勉強法を「オウム返し型」と呼ぶことにしよう。英語的環境に放り込んでしまえば、人は楽に英語を身につけるはず、という考えである。英語は英語話者に習え。必死に相手の言っていることを聞き、オウム返ししていれば、自然と単語や言い回しなど覚えるはず、だという。

「そりゃそうだ」と言いたい気持ちにはわかる。私自身、そういう環境で英語を学んだ経験はある。効力もわかる。ただ、この方法がこれまで日本でどうしても根づかなかったというのも厳然たる事実である。少し考えてみれば、その理由は思いつく。まず〈英語的環境〉に浸るためのコスト。人、場所、時間、とすべての局面でかなりの出費と犠牲を伴う。他の活動や生活を差し置いてそうしたセッティングを作る余裕が一般にあるのか。そりゃあ無理だから、都合のつく範囲で、となるので

見出しは「英会話の起源」である。

果たして、英会話に起源などあるのか？ もちろん人は太古の昔から会話をしてきた。しかし、この本で焦点をあてたかったのは、近代のヨーロッパで会話が「術」として注目を浴びるようになり、イギリスでも一七世紀から一八世紀にかけて言語に対するきわめて繊細な感覚が育まれたということである。表現のえらび方以外にも、食卓で話題にすべきこと、相手の真意を読み取る方法、重要な場面での会話の例など、言葉について意識すべきことが細かく記述された。印刷術が普及し始めたこの時代、作法書 (conduct manuals) はすでに大きな人気を博していたが、とくに注目が集まったのが言葉の使い方をめぐる「作法」だったのである。

では、言葉の作法がとりわけ気になる「重要な場面」とはいつのことだろう。答えははっきりしている。プロポーズのときである。一八世紀の作法ブームと密接に絡んでいたのは結婚市場だった。男が女に愛を告白し、結婚を提案する。そんな状況ではどんな言葉がかわされるべきか。男子にとっても女子にとってもこれは大きな関心事となった。たとえば日本でも人気のあるジェーン・オースティンの『傲慢と偏見』は男女がどうやって接近するかを描いた作品で、ストーリーの山場では必ずプロポーズがからむ。この時代の作品は、そういう意味では男女の付き合い方の「マニュアル」として機能していたのである。こうした「マニュアル」が普及しえたのは、そもそも人間に

「性格」なるものがあるとされたからである。性格は振る舞いや言葉の使い方を通して露出する。そこを見極めたい。人間はこうして観察の対象となった。観察という行為は、まずは対象に注意を向け、じっと見ることから始まる。近代社会の中で小説というジャンルが特別な位置を占めたのも、人間に対するこのような「興味の磁場」が生まれたことが大きい。小説には人物描写というものがある。そもそも好き好んで描写などという面倒なことを作家が行い、読者がそれに付き合うのも、その奥に何かを読み取りたいという「注意のベクトル」が存在し、それを作家と読者が共有するからなのである。

ただ、面白いのは、対象への興味なるものが「語り手→読者」、もしくは「読者→語り手」といった方向でも発生しうることである。だから、語り手や読者も振るまいのコードを意識する。性格すら持つ。たとえば、語り手は読者に対する「善

意」や「親しみ」を織りこんで語りたりする。そういう語り手からの「親しさ」の表明は、読者の方にも何らかの（読み心地）を生む。愛と善意と親しさに満ちた語り手という像は、近代の出版物ではほとんど約束事とさえなってきた。ただ、二〇世紀にかけてテクストの善意の表明の仕方が変わる。語り手が示す善意を読者が素直に受け取らなくなってくるのである。どうも裏があると思えてしまう。「善意の表出」というより、「善意の演出」と見えてしまう。

そういう流れの中で、次第に語り手も素直に「善意」を表現しなくなる。一九世紀から二〇世紀にかけての文学作品では、愛情や敬意よりも、無愛想やイライラ、冷淡、ときには嫌悪感が示される。私たちは「善意」よりも「悪意」にこそ敏感に反応するようになったのである。ときには、「善意」を伝えるのに、「悪意」の仮面をかざる必要さえある。というわけで拙著

では、シェイクスピアやジェーン・オースティン、ルイス・キャロルからD・H・ロレンス、ウイリアム・フォークナーまで、英語圏の作家を題材にしてどのようにそのテクストから「善意」や「悪意」が読み取れるかを具体的に検討したのである。

善意や丁寧さの表現は、敬語や礼儀作法の発達した日本語特有のものだと思ふ人もいられるかもしれない。日本語の敬語はなかなかうまく外国語に翻訳できないとも言われる。しかし、敬意や善意や親しみといったものをあらわすコードは、人間文化にある程度普遍的にみられることがわかっている。近年、言語学や行動学で話題になる「配慮（ボライトネス）」という概念もそのことを理解する助けとなる。人が相手に対して「配慮」を示すのにどのような方法があるのか、それはどのように運用されるのかといったことを、文化や地域をこえて考察する基盤は整いつつある。拙著では、そうした態度表明の痕跡を、時代を代表する作品の中に確認することで、一種の文学史を描いてみようと思つた。

3 英語教育の出発点

そこで英語教育の話に戻りたい。善意にしても親しみにしても、不満にしても悪意にしても、言葉にまぎれて「何となく相手から感じる気分」というのは、コミュニケーションの中ではきわめて大事なものだ。なかなか成文化はできないけれど、何

らかの形で学習者に知ってもらふ必要がある。とくにシグナルとして出したつもりがないのに、相手にシグナルとして受け取られる可能性がある以上、こうしたルールを知っているかどうかは切実な問題となる。

しかし、今、私が言いたいのは、英語教育のトピックにこうした「配慮」についての項目を追加せよ、ということではない。むしろ注意を引きたいのは、「配慮」の働き方を教わるにせよ、自ら学び取るにせよ、学習者にはある準備が必要だということである。言葉は相手へと向かう「興味」なくしては動き出さない。シャドウピッチングや素振りだけではだめなのだ。もちろん、相手に愛と善意を示しましょう、というのでもない。ときには悪意や嫌悪感を持つてしまうこともあるだろう。でも、善意も親しさも冷淡もイライラも、「興味の磁場」があればこそ生ずる心の働きなのだ。そうやって「興味の圏域」をあちこちに設定するのが、まさに人間の文化というものだった。

言葉を学ぶときに、そうした要素をなおざりにしたらいったい何を学んだことになるのだろうか。すでに言葉のかわりに、電子データによる文字や記号やイメーションを通して行われるやり取りは多い。そのことを嘆く人もいるが、言語が通じない人同士がやり取りするうえでこうした装置が有効なことは認めなければならぬ。「言葉的なもの」を代理するメディアは、これからほとんど形を変えていくことだろう。しかし、変わらない

ものがある。どんなやり取りも、注意が向かなければ始まらない。コミュニケーションで最低限必要なのは、言葉やジェスチャーですらないのだ。注意を向け興味を持つという過程こそが第一歩である。すぐく当たり前聞こえるだろうが、そんなことをあらためて考えなければならぬのが今のコミュニケーションの状況なのである。

「英語漬け」をとる人々の多くは、おそらく「何でもいいから、とりあえず仕事で英語が使えるようになってほしい」と思っている。英語なんか道具にすぎない。透明であればあるほどいい。だから「つべこべ言わずにやれ」と言う。もちろん「つべこべ言わずにやれ」でうまくいくこともある。でも、うまくいくのはおそらく、興味という要素ががちり食いこんだときだ。一人日本語の通じない社会に放り出された人なら誰でもわかるだろうが、その根源的な不安は相当なものである。

いのかもれない。言葉をなめてはいけない。言葉の根は、人間の奥深く、神経や内臓や心や魂といった思いがけない深さまで伸びている。地上に出ている部分だけ手軽に所有すればどんなに楽かと思う。でも、そうはいかない。

その先に踏み出すための可能性はあちこちに見えている。言葉を使えるようになるには、まずは言葉に興味を持つべきだ。さらには「興味を持つ」とはどういうことかに興味を持ちたい。文法や訳読といった旧来の教育法も、そうした点ではそれなりの効果があった。それを一生懸命忘れようとするのは愚かなことだ。「英語教育」とは「英語そのもの」なるものを教えることだという幻想を早く捨てたい。英語にせよ国語にせよ、せつかく学校制度の中に、「注意」や「興味」や「意味」がどう機能するかを考え、対応力を鍛える場があるのだから、それらがうまく活用されることを願ってやまない。

だから、必死になる。必死でまわりの世界に聞き耳を立てる。しかし、この時点ですでにその人は道具としての英語などには越えた領域に足を踏み入れている。死活問題として、英語の周辺領域に関心を持たざるをえないのだから。

今、熱く英語教育について語る方々にあらためて意識してほしいのは、この興味のメカニズムである。教育現場で言葉を扱う以上、興味や関心と「言葉そのもの」とを切り離して考えることは不毛である。言葉の向こうには必ず人間がいる。その人間にどのように注意を向け、何を読み取り、どう反応するか。そうした要素から切り離したら、言葉はその養分を失い屍のようになるだけだろう。こんなに熱く英語教育を語ってきたのに、なぜか人々が英語について熱くなれないのだとしたら、それは英語教育を英語だけのこととして考えてきたためではないだろうか。ほんとうは「英語教育」などという領域は存在しない

*1 寺沢拓敏『日本人と英語』の社会学(研究社)は、このあたりの事情についてデータをまとめた批判を行っている。とくに第五章「英語学習熱」「語学ブーム」は実際にそれだけのものなのか?」参照。
*2 たとえば刀柄正明が「朝日新聞」で何度か連載している「英語をたどって」というシリーズでもこの点が指摘されている。二〇一三年一月八日夕刊「人材不足は教育のせい。」など参照。

平成29年度入学試験 面接「概要とねらい」

(入試情報公開用)

人間発達文化学類 推薦入試Ⅱ 区分 (④小または国・英)

言語に関する資料を直前に受験生に読ませ、面接では資料の内容について
集団で討論を行なう。議論への参加態度および発言の内容にもとづいて、
受験生のコミュニケーション能力、文章読解力、表現力、言語および教職
への関心、意欲などについて総合的に評価する。